ひのし

Ⅰ-1-8

こて

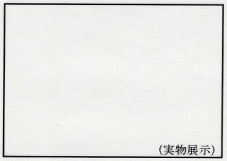
Ⅰ-1-8

炭火アイロン

底を押しつけて衣服などのしわを取る道具です。中には炭を入れました。この炭火アイロンが登場する前は「焼き鏝」や「火熨斗」でしわを取っていました。「焼き鏝」は炭で熱くしてからしわを取りましたが、広い部分には適しません。また、「火熨斗」は中に炭火を入れて使いましたが、袖口や折り目など細かい部分には適しませんでした。それに比べると炭火アイロンは炭を入れる手間はありますが、広い面積でも扱い部分でも両方に使えるので大変便利な形をしていると言えます。

戦後、電気アイロンに変わりましたが基本的な形はほとんど変わっていません。

Ⅰ-1-8



(実物展示)

炭火アイロン

Ⅰ-1-8

変わるもの

～今ではあまり使われていない道具～

昔の道具の中には今ではもう使われなくなってしまったものもあります。しかし、形や使い方などが変わってしまっても、その仕組みや考え方は今の道具に受け継がれているものがたくさんあります。ここにも昔の人たちの知恵や工夫が生き続けていると言えるでしょう。

Ⅰ-2

農業で使う道具

昔から日本人は米を食べて来たので今も昔も農業は重要な産業であり、ほとんどの人が農業をしているという時代が長く続きました。

[記録によれば、明治22年の名取市の戸数（旧司村合計）2520戸のうち、農業をしている家は1994戸であったということなので、当時は10人のうち8人が農家だったことになります。]

「米」という字の形は八十八回手をかけなければならないところからできたと言われるほど米は手間になるまでに様々な作業が必要です。それに合わせて昔からいろいろな道具が工夫されてきました。それでも現在のようこ機械化が進んでいないころはほとんど全て手作業で行わなければならず大変な重労働でした。農業で使う道具には昔の人々の知恵や工夫とともにその苦労も染み込んでいるようです。

ここでは、昔の道具の形やや仕組みが現在の農機にどのように生かされているのか見ていきましょう。

Ⅰ-2-1